

④ 昭和36年9月「県政ニュースNo.36」

【施設の完成あいつぐ(駅・空港・県民会館・寒風山有料道路)】 東北で盛岡に次いで二番目の民



衆駅、秋田駅がこのほど完成しました。昨年の8月から総工費3億7,000万円で建築中だったこの建物は、鉄筋コンクリート2階建て、面積5,900平方メートル、今までの駅よりざっと5倍もある大きさ。1階の出札口や待合室は、10年後の乗降客がいまの2倍になると見込んで設計しただけあって、日に10万人以上のお客を楽にさばけるとい

ゆったりとしたもの。2階はステーションデパートで、1階の待合室とはエスカレーターで結ばれており、またホームからも入れるようになっています。ここには県内の名産品や日用品、食堂などがあって、旅行者や通勤の人たちに利用されています。県都秋田市の表玄関にふさわしい交通の拠点として、その機能を十分果たすことでしょー。

⑤ 昭和38年12月「県政ニュースNo.53」

【ふるさと散歩…秋田駅】 街がひっそりと眠っている朝まだき。しじまを破って秋田駅の一日がすでに始まっている。ここから発着する列車の数は460本、3分に一本の割合である。これら列車の運行はすべて鉄道管理局の司令室で行い、刻々変わるダイヤを四六時中追っている。



秋田駅は、青森-秋田間に初めて汽車が走った明治35年の昔から、県都の玄関口として親しまれ、秋田県人の郷愁のよすがともなっている。

一番乗りは行商である。20万をこえる秋田市民の台所に魚・野菜を供給する。ラッシュアワー。一日の乗降客約5万のうち、1万6,000人は通勤・通学だ。特急が同時発車するのは全国でただひとつ、この駅の名物である。一部ながら複線にもなった。これを全線に普及させ、電化を図るのが今後の大きな課題である。消費都市秋田をひかえて、貨物は年間50万トン、延べ3万5,000両の貨車があるが、とても間に合わない。県では基金によって民有貨車200両を作り、滞貨の解消に一役かっている。

おなじみの赤帽さん。駅の誕生とともにここに生きて60年。秋田国体を契機に、民衆駅として様相を一変した。今日も幾組かのカップルが祝福と励ましを受けて、夜のホームを離れて行く。

県民の希望を包んで、秋田駅はふるさとの駅として親しまれていくことであろう。

～ご来場ありがとうございました～

■ 秋田県公文書館 ■

〒010-0952 秋田市山王新町14-31

TEL 018-866-8301

FAX 018-866-8303

E-mail koubun@apl.pref.akita.jp



県政映画上映会

～懐かしき昭和三十年代の我が秋田～

平成25年11月10日(日) 秋田県公文書館 3階 多目的ホール
午前の部 11:00～正午 午後の部 14:00～15:00

本日のプログラム

◆ ごあいさつ ◆

◆ 前半 ◆

① 昭和33年9月「県政ニュースNo.15」

- ・ 県体開く
- ・ みのりの秋
- ・ “みたま” やすらかに
- ・ 八郎瀧干拓工事始まる

② 昭和33年11月「県政ニュースNo.17」

- ・ 第13回国体開く(富山県)
- ・ 文化の日に讃える
- ・ ぼくらの温泉プール(旧本荘市)
- ・ 海底油田掘さく進む(旧由利郡道川沖)

◆ 後半 ◆

③ 昭和35年3月「県政ニュースNo.25」

- ・ 予算県議会開く
- ・ 雪国の民芸品(旧十文字町・旧増田町)
- ・ 動きだしたビート工場(大館市)
- ・ 白鳥の十和田湖
- ・ 健康な村めざして(旧雄和村)

④ 昭和36年9月「県政ニュースNo.36」

- ・ 第16回国体開く～夏季ボート競技会～
- ・ 施設の完成あいつぐ(駅・空港・県民会館・寒風山有料道路)
- ・ 県民の窓…西馬音内の盆おどり

⑤ 昭和38年12月「県政ニュースNo.53」

- ・ 復興にたちあがる(旧峰浜村石川)
- ・ 冬に学ぶ山の子ら(旧雄勝町湯ノ岱小・上小阿仁中)
- ・ ふるさと散歩…秋田駅

～はじめに～

郷土秋田のニュース映画を5本上映!



かつて「県政映画」は、「県政だより」「県政ニュース」などの名前で、県内各地の映画館で本編映画の幕あいに上映され、その時々々の県政に関するニュースや各地域の話題などを提供していました。

秋田県公文書館では、これら県政映画を保存し閲覧室で公開しておりますが、スクリーンで上映し大勢でご鑑賞いただく上映会も開催しております。

今回は、所蔵する県政映画の中から、秋田の歴史や文化、暮らしを記録した5本の作品を上映します。

どれも当時をしのばせる貴重な映像ばかりです。ノスタルジーあふれる昭和30年代の秋田をぜひご覧ください。

～ナレーション採録～ ■ナレーションの一部を採録しました■



① 昭和33年9月「県政ニュースNo. 15」

【八郎潟干拓工事始まる】 数々の伝説と湖畔漁民の愛着を秘めた八郎潟は、起工式を境に、7年後には新しい土地に生まれ変わることになりました。県では起工式にさきだって、湖岸八竜神社前で干拓の早期完遂の祈願祭と、この湖で命を失った人々の慰霊祭を行い、関係者の深い感慨を誘いました。一方、地元では干拓を記念する花火を打ち上げ、湖岸の夜空を飾りました。

こうしたうちに、干拓工事の主役となる最新式の浚渫船「双竜」などが深夜の船越水道付近に到着。船団は暗闇に照明灯が輝く中を、八竜橋をくぐって八郎潟に入りました。

引き続いて去る8月20日秋田市では、農林大臣、技術援助国のオランダ大使館員をはじめ、内外関係者およそ1,000人が集まって盛大な起工式が行われ、世紀の大事業の着工を祝いました。続いて関係者は、干拓工事の現場や、八郎潟干拓のため特別に作られた浚渫船の試運転を視察しました。2万2,000町歩の広大な湖面の大半を干しあげ、完成後には年間36万石の米が増産される沃土に変えようと、建設は力強く進められています。湖の底をかきまわして土砂を吸い上げる浚渫船。パイプで輸送される土砂。船越と払戸を結ぶ堤防工事も着々と進んでいます。

1万7,000町歩の緑の土地と4,700戸の新しい農家の誕生を前に、湖畔では今日も、消えていく湖に名残りを惜しみながら、平和な潟魚の漁が行われています。

② 昭和33年11月「県政ニュースNo. 17」

【海底油田掘さく進む(旧由利郡道川沖)】 我が国で初めての海底油田の掘さく作業が、いま由利郡道川沖で石油資源開発会社の手で行われています。

現場には、総重量3,800トンの掘削船「白竜号」がその巨体の足を海中に固定、海底2,000メートルの油脈に挑んでいます。風速50メートルまではびくともしないといわれる白竜号の巨体は、全く人工の島といった感じ。一日の掘削作業は現在約100メートル、11月中旬まで目的の深さまで掘り下げる予定です。

白竜号を設計したアメリカ、ルトーノー社の技師も作業を見守っています。

白竜号と秋田港の間は一日2回の連絡船が往復、白竜号のウィンチが人や資材を運びます。500のベッドを擁する立派な宿舎、清潔な調理場、娯楽室。さながら小さなホテルといった白竜号の設備です。

成功のあかつきは八橋油田をしのぐ規模の石油がとれるといわれ、難しい外海での海底油田開発は、我が国科学界の注目の的となっています。

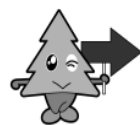


③ 昭和35年3月「県政ニュースNo. 25」

【雪国の民芸品(旧十文字町・旧増田町)】 雪深い農村の手すさびとして作られてきた、みの・けら・笠などの生活用具も、新しい時代の波に消えようとしています。しかし、こうした民芸を現代にも生かそうと、県南の十文字町仁井田部落と増田町戸波の民芸保存会ではいま、装飾用の笠やけらをはじめいろいろ新しい民芸品を作っています。

仁井田笠として昔から広く愛用されてきたこの菅笠は約400年前、いまの富山県から伝わったものといわれます。

これは「大野」といわれる普通の雨笠。上流婦人の道中に用いられた優雅な「元録笠」。また、「道中笠」など素朴な民芸は、人の心に潤いを与えてくれます。色紙や短冊掛けなどに応用された「一文字笠」。また、「戸波けら」の愛称で県南農村の暮らしに溶け込んできたこのけらは、元録の頃から作られてきたといわれます。海草やしなの木の皮をアクセサリーにした「化粧げら」。農村の祝儀に用いられていた豪華な「祝いけら」。小さなけらと菅笠のコンビで作られている装飾用壁かけなど、雪の上に生まれた民芸品は、いま新しい着想で生まれ変わろうとしています。



【公文書館からのお知らせ】
開館20周年記念展示「秋田県公文書館所蔵文化財展—秋田には財(たから)がある—」
後期：10月30日(水)～11月30日(土) 当館2階特別展示室にて開催中!